慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中世ヨーロッパの挿絵入り薬草事典に関する一考察
Sub Title	A study of medieval European illustrated herbals
Author	池田, 真弓(Ikeda, Mayumi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2026
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.156 (2026. 3) ,p.35- 61
JaLC DOI	
Abstract	This paper explores how the role of illustrations in medieval European herbals changed over time and in various contexts. The negative view of plant illustrations held by Pliny the Elder in antiquity was persisted well into the Middle Ages, resulting in the general lack of illustrations in medieval herbals. The paper examines such exceptions as the beautifully illustrated Vienna Dioscurides manuscript from the sixth-century Byzantium; an eleventh-century Old English translation of Pseudo-Apuleius's Herbarius, which is accompanied by schematic illustrations; the Tractatus de Herbis of ca. 1300 from the circle of the Salernitan medical school with life-like depictions of plants; and the 'Carrara Herbal', a sort of artistic plant album created ca. 1390 in the Paduan court. The paper demonstrates how, in differing contexts, herbal illustrations could convey political messages, enhance the usability of the book, reflect scientific or academic interests of the compiler or the commissioner, or be presented as a token of wealth, power, and intellect. The advent of movable-type printing in the mid-fifteenth century enabled illustrated herbals to be widely distributed, thereby contributing to the democratization of knowledge. We also witness a change in attitude towards plant illustrations from those of Pliny; as demonstrated in the Gart der Gesundheit, published in Mainz in 1485, realistic depictions of plants were finally considered a virtue in which the publisher took pride.
Notes	特集 : 遠山公一君退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000156-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守し

てご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中世ヨーロッパの挿絵入り薬草事典に関する一考察[1]

池　田　真　弓*

A Study of Medieval European Illustrated Herbals

Mayumi Ikeda

This paper explores how the role of illustrations in medieval European herbals changed over time and in various contexts. The negative view of plant illustrations held by Pliny the Elder in antiquity was persisted well into the Middle Ages, resulting in the general lack of illustrations in medieval herbals. The paper examines such exceptions as the beautifully illustrated Vienna Dioscurides manuscript from the sixth-century Byzantium; an eleventh-century Old English translation of Pseudo-Apuleius's *Herbarius*, which is accompanied by schematic illustrations; the *Tractatus de Herbis* of ca. 1300 from the circle of the Salernitan medical school with life-like depictions of plants; and the 'Carrara Herbal', a sort of artistic plant album created ca. 1390 in the Paduan court. The paper demonstrates how, in differing contexts, herbal illustrations could convey political messages, enhance the usability of the book, reflect scientific or academic interests of the compiler or the commissioner, or be presented as a token of wealth, power, and intellect.

The advent of movable-type printing in the mid-fifteenth century enabled illustrated herbals to be widely distributed, thereby contributing to the democratization of knowledge. We also witness a change in attitude towards plant illustrations from those of Pliny; as demonstrated in the *Gart der Gesundheit*, published in Mainz in 1485, realistic depictions of plants were finally considered a virtue in which the publisher took pride.

現在の日本を代表する薬草事典『原色牧野和漢薬草大圖鑑』の初版には，刊行趣旨として「生薬原料となる植物を精密な原色図版により再現，多くの研究者・愛好者の方々に“薬”としての植物をより深く理解していただく」（下線は筆者による）と記載されている[2]．実際，本書には全ての項目にカラーの図版が付されており，写実的かつ明快な挿絵によって，分かりやすく使いやすい図鑑となっている．しか

* 慶應義塾大学理工学部　外国語・総合教育教室

しながら，中世ヨーロッパにおける薬草事典やそれに類するテクストでは，挿絵を付すことはむしろ例外的だった．また，挿絵が入れられたとしても，実際の薬草の姿とは似ても似つかない絵が描かれるなど，種の特定に必要な情報が欠落していることが少なくない．その一方で，時代を先取りするかのような写実性を備えた挿絵も存在する．このような中世の薬草事典における挿絵の有無や写実性の度合いの違いは，挿絵入り薬草事典がどのように受容され，利用されてきたのか，ひいては，書物の挿絵にはどのような役割があったのか，という問いを我々に投げかける．

本稿では上記の問いに答えるべく，6 世紀初頭から 15 世紀終わりまでの千年近い時代の中から，鍵となりうる作品を定点観測的に取り上げる．紙幅の都合上，各作品の緻密な分析はかなわないが，長い時間軸で薬草事典を概観することで，挿絵の持つ意義や役割の変遷を捉えたい．

1. 中世の前提としての古代：大プリニウスの見解

まず本題に入る前に，中世薬草事典の挿絵を理解するにあたって極めて重要となる，大プリニウス（23–79 年）の見解を確認したい．彼の著した『博物誌』第 25 巻第 4 節『自生植物の性質，植物の価値』には，以下のように記されている．

> 「クラテウアス，ディオニシオス，そしてメトロドロスは［中略］植物の外観を描写し次にその下にその性質を記した［中略］．絵というものは，色彩が非常に多いときには，特にその目的が自然を写すことにある場合には，誤りを犯すばかりでなく，そのほかに謄写する人々の正確さにも何重もの危険があり，それから多くの不完全さが生ずるものだ．加うるに冬の植物をその生涯の一時期においてのみ描くということは十分といえない．それは四季の移り変りによって変貌するものなのだから．」[3]

ここから読み取れるのは，植物の形状や性質を描写するのに挿絵は不適切であり人々に誤解を招く危険を有するものという，挿絵に対する大プリニウスの否定的な態度であり，冒頭で見た『原色牧野』の刊行趣旨とは，まさに真逆の見解といえる．このような，挿絵は不完全で信頼性に欠けるという認識は，実は古代に限ったものではなく，ヨーロッパ中世においても長く共有されていた．薬草事典の信頼性

は，挿絵にではなく言葉にあったのだ．にもかかわらず，中世を通じて挿絵入りの薬草事典が制作されていたのも事実である．それでは，薬草事典に挿絵が描かれた場合，それにはどのような役割や意図があったのだろうか．まずは，6 世紀初頭にビザンティン帝国で作られた有名な挿絵入り本を取り上げて考えてみたい．

2. ディオスコリデス『薬物誌』ウィーン写本

現在，ウィーンのオーストリア国立図書館に所蔵されているディオスコリデス『薬物誌』の写本は，ほぼ完本の形で残っている薬草事典としては現存最古であるのみならず，美しい挿絵が数多く入れられていることでも知られている（図 1）[4]．写本には『薬物誌』のほか，複数の薬学もしくは自然科学関連のテクストが含まれている．本写本の挿絵の最大の特徴は，その多くが，種を同定できるほど質が高く，活き活きと描かれている点であろう[5]．実際には，自然観察に基づいたものばかりでなく，良質な手本をコピーしたものも多く含まれているようだが，写本冒頭を飾る挿絵群では，興味深いことに実物の観察によって挿絵を描いたことが暗示されている[6]．フォリオ 4v では，発見と霊感の擬人像ヘウレシス（Heuresis）が，著者ディオスコリデスにマンドラゴラを差し出しており，続くフォリオ 5v では，ディオスコリデスが書物を開いている横で，知力の擬人像エピノイア（Epinoia）が画家にマンドラゴラを示し，それを画家が写生している様子が描かれているのだ（図 2）．つまりこの絵は，実際はどうあれ，本書の挿絵は実物をもとに，知力のインスピレーションも受けつつ描かれたことを読者に示しているといえる．

『薬物誌』は，古代ローマで活躍した医師ディオスコリデスが 1 世紀半ばに執筆した薬物事典だが，もともと本テクストに挿絵を付す伝統はなかった[7]．では，ウィーン写本にこのような挿絵が入れられた理由は何だったのだろうか．ここで重要となるのが，本写本の受容者という要素である．ウィーン写本は，父は西ローマ皇帝フラヴィウス・アニキウス・オリブリウス，母は東ローマ皇帝テオドシウス 2 世の直系の子孫，という皇女アニキア・ユリアナが 512 年もしくは 513 年にホノラタエ地区に聖堂を建立したことに謝意を示す贈り物として，同地区の住民がユリアナに献呈したとされている．本写本の受容者が医療の専門家ではなく，皇帝直系の由緒正しい家系出身の女性であったということは，挿絵の役割を考えるうえで重要であろう．Leslie Brubaker は，ウィーン写本は，本写本そのものにアクセスし，さらには

図 1　Wien, Österreichische Nationalbibliothek, Cod. Med. Gr. 1, fol. 29v「オオバコ」(*Plantago asiatica* L.)

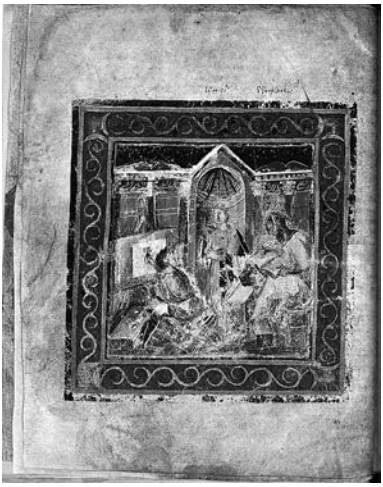

図 2　Wien, Österreichische Nationalbibliothek, Cod. Med. Gr. 1, fol. 5v《ディオスコリデスの肖像》

テクストの内容をも理解することで初めてその挿絵も理解することができる，つまり極めて限定的な受容者のために贅を尽くして制作された知的な奢侈品であると指

図 3　Wien, Österreichische Nationalbibliothek, Cod. Med. Gr. 1, fol. 6v《アニキア・ユリアナの肖像》

摘している[8]．つまり，本書は単なる実用書ではなく，写実的で美しい挿絵を楽しむ目的もあった可能性が高い．

さらに，フォリオ 6v に描かれたユリアナの肖像を見てみると，本写本の制作意図に強い政治的メッセージがあったことが読み取れる（図 3）．玉座に座り，観者から見て左に『寛大』，右に『洞察』の擬人像を伴い，足元では跪いて足に接吻する『諸芸の謝辞』が描かれているユリアナのこのような表現法は，皇帝の描写法と似通っているとの指摘がなされている[9]．このような描写には，当時，皇帝に比する絶大な権力と財力を誇っていたとされるユリアナの聖堂建立という慈善行為と，彼女の正当なる血筋を称揚する意図が読み取れる．また，本写本の冒頭（フォリオ 2v と 3v）には，主にこのテクストで引用されている著者らの肖像画が描かれているが，Minta Collins によれば，彼らは全て，ギリシア語で執筆を行い，当時の東ローマ帝国領内出身，もしくはそこで活動していた医師たちだった[10]．つまり，ユリアナの母方の家系アニキウス家の出身地域を代表する医師たちなのである．

それでは，ユリアナへの贈り物として薬物誌というジャンルが選ばれたのはなぜだろうか．それについて Brubaker は，当時のビザンティンにおいて，女性が医療や癒しの責務を果たしていた状況，さらに，ユリアナのような権力者の場合，宮中の多数のメンバーの健康管理を担っていた点を指摘する[11]．それに加え，薬物誌は

古代ギリシア・ローマの知を結集した書物であるという点にも注目したい．薬物誌は，その所有者の知的関心の高さを示すのみならず，ギリシア・ローマ双方にルーツを持つユリアナにとっては，自身をその知の継承者という立場に位置付けることも可能なジャンルの書物なのである．

ウィーン写本は，ユリアナという女性権力者の慈善行為，知性，良き血統という要素をすべて代弁するのみならず，その挿絵の美しさで鑑賞物としても機能した，特別な一冊だったといえる．ホノラタエ地区の住民たちは，聖堂建立に対する返礼として，当代随一の権力者に絶妙な贈り物を用意したのだ．

3. 7–11 世紀：図式的な挿絵の役割

ここからは西ヨーロッパに目を移したい．本地域では早くも 5 世紀前後からギリシア・ローマ医学の知識が翻訳や編纂を経てイタリアを中心に流入していた[12]．それらは，おおよそ 7 世紀から 11 世紀にかけて，医療の学びと実践の中心であった修道院をはじめとするキリスト教のコンテクストの中で継承された[13]．ベネディクト会会則第 36 章に病気の修道士たちの看病について定められていることからも，修道院が当時，医療行為を活動の一つに据えていたことがうかがえる．当然，薬草関連のテクストも流布していたが，そのほとんどは挿絵を含まないのが一般的だった．そのなかで特筆すべきは，4 世紀後半に執筆されたとされるアプレイウス・プラトニクス（Apuleius Platonicus），もしくは「偽アプレイウス」に帰属されているテクスト『本草書』（*Herbarius*）を中心に，複数のテクストで構成された編纂書である[14]．実はこの編纂書に限っては，中世を通じて挿絵入り本が制作され続けた[15]．本書は全部で 130 から 131 の章から成り，各章に一つの薬草とその挿絵が入れられるという形式が一般的だが，この明快な形式は使用者にとっても非常に使いやすく，テクストと挿絵がセットとなって流布した要因の一つとなったと考えられる．偽アプレイウスのテクストの現存最古の写本は 6 世紀後半もしくは 7 世紀に南イタリアで制作されたと考えられているが，この写本にも挿絵が入れられている（図 4）[16]．

ただ，偽アプレイウス写本の挿絵は非写実的，図式的な描写が大半である．そのような挿絵には，一体どのような役割や意図があったのだろうか．ここでは，1000 年頃にイングランドで古英語に翻訳された，現存最古の俗語訳の偽アプレイウス写本群を採り上げて考えたい．現在 4 冊の写本が現存しているが，挿絵が入れ

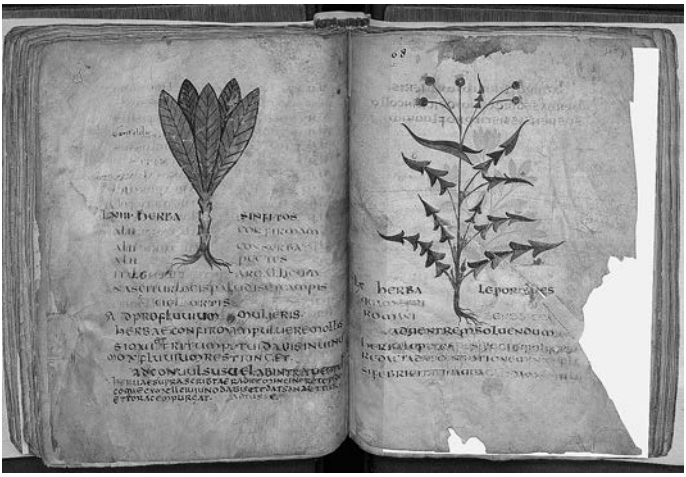

図 4　Leiden University Library, VLQ 9, fol. 70v-71r「ヒレハリソウ」(*Symphytum officinale* L.), 「ダイコンソウ属」 (*Geum*, Avens)

図 5　London, British Library, MS Cotton Vitellius C III, fol. 56v「パセリ」(*Petroselinum Hortense* Hoff.), 「キャベツ」(*Brassica oleracea* L.)

られているのはそのうちの 1 冊，大英図書館所蔵の「コットン写本」のみである（図 5）．残る 3 冊のうち 1 冊，ボドレー図書館本は，挿絵を入れるためのスペースが空けられているものの，挿絵が入れられた形跡はない[17]．

本書のテクストの利用ということに関していえばまず，俗語で書かれているという点から，ラテン語に通じていない人間でも使用可能だったということが指摘できる．また，ラテン語から古英語に翻訳される際に，テクストの順番を入れ替えたり一部を削除したりするなど，実用を意識した編集が行われたことが明らかになっている[18]．そのようなテクストの写本群において，挿絵なしの現存数の方が多いということは，テクストの使用に際して挿絵は必須ではなかったといえそうである．

であればなぜ，コットン写本には挿絵が入れられたのだろうか．ここでは 2 つの観点からその理由を考えたい．一つ目は，挿絵そのものの持つ価値である．この写本では，挿絵の質や，使用されている絵の具がテクストのインクと異なることなどから，写字生とは別の，職業画家が挿絵を担当したことが推察される[19]．また，本書には扉絵が 2 枚もあり（フォリオ 11v と 19r），さらに独立した装飾タイトルページ（フォリオ 19v）も含まれており，特注本であったことが推察される[20]．残念ながら本書の注文主や制作地は判明していないが，カンタベリーのクライスト・チャーチもしくはウィンチェスターが有力候補として挙げられている．双方とも，当時のイングランドを代表する大聖堂や修道院を擁しており，写本の制作地としても有名であった．本書は，いずれかのスクリプトリウム（写字室）で，単なる実用以上の，特別な事情のもとで注文された一冊だったと考えられる．

挿絵が挿入された理由に関する今ひとつの観点として，個々の挿絵の持ち得た役割についても考えたい．ここで重要となるのは，描かれた薬草の種を特定する用途があったかどうかという点である．実は，本書の挿絵の大半は，絵を見るだけでは種を特定することはほぼ不可能で，そもそも採録されている薬草には，地中海地方原産種など，当時のイングランドで生育していなかった可能性が高いものも含まれていた[21]．これまでの研究では，温暖化の影響で当時のイングランドでもそのような薬草の一部は生育できた可能性や，特定の挿絵，例えば蛇の挿絵については，種の特定が可能なものもあること，また挿絵によっては，生育している状態ではなく，乾燥した状態のものを描いた可能性についても指摘されている[22]．

中世の薬草事典の挿絵の写実性に関する問題では往々にして，それが種の同定に

利用されていたかどうかという点が議論される．しかし忘れてはならないのは，中世の薬草事典では，一つの写本の中に非常に図式的なものから，比較的正しく特徴をとらえているものが混在しているということだ．種の同定を目的として挿絵を描いたのであれば，冒頭で言及した『原色牧野』のように，全ての挿絵に一定程度の写実性がなくてはその目的は達成されない．写実性にばらつきがあるのは，画家の都合や知識，アクセスできたリソースなど，恣意的な条件に依存しているためと考えられる．つまり，画家がたまたまその薬草の見た目を知っていた，あるいは使用していた見本の挿絵がたまたま写実的だったため，写実的な挿絵を描くことができたかもしれない，ということである．そのように写実性にばらつきのある挿絵群は，種の同定を目的として描かれたとは考えにくい．

それでは，種の同定を目的としていない挿絵にはどのような用途があったのだろうか．まず挙げられるのは，テクストの構成を視覚化し，使用にあたっての利便性を高めるという点である．本書では，基本的に一つの章の冒頭に挿絵が入れられているため，挿絵が章を視覚的に区切る役割を果たしている．例えば（図 5）では，左欄の後半から始まる第 129 章「パセリ」（*Petroselinum Hortense Hoff.*）の直前にパセリの，そして続く第 130 章（右欄中央）「キャベツ」（*Brassica oleracea L.*）の直前にその絵が描かれている．挿絵は，章の始まりを視覚的に提示しているのである．

また，挿絵を入れることでテクストの記憶や理解の促進につながると考えられていた可能性もある．イメージを記憶の助けとして利用するのは，古代から中世にかけて広く知られていた記憶術の一種である．例えば，紀元前 1 世紀にローマで書かれたとされる作者不詳のテクスト *Ad Herennium* には，暗記を促すために，平凡ではない「力強い図像」（*imagines agentes*）を用いるようアドバイスをしている[23]．また，コットン写本の制作から 1 世紀ほど後にウェストミンスターで修道院長を務めたギルバート・クリスピン（Gilbert Crispin, 1085–1117 年）は，絵（*pictura*）について，「文字が話し言葉の形や記号であるのと同様に，絵は書き言葉の似姿（*similitudines*）や記号として存在している」と述べており，話し言葉が文字へ，そして文字が絵へと記号化されるという認識を示している[24]．さらに，中世ではイメージがテクストの理解を促進する役割があったということも，Michael Evans によって指摘されている[25]．挿絵に記憶あるいはテクストの内容理解を促す役割があるのならば，ディテールまで描き込んだ写実的な図より，簡潔かつ図式的に描いた方が効果的であ

ろう．

ついで重要なのは，挿絵は個別の薬草の特定の時期の状態を描写するのではなく，その種の総体を表象すべきという考え方である．写実的な，つまりその薬草のある瞬間をリアルに捉えた絵は，大プリニウスが批判しているように，その種の不完全な姿を写し取ったに過ぎず，むしろ図式的，概念的な表象の方が，読者に誤解を与えないという点で優れた描写法と考えられていた可能性はある．

また興味深いことに，薬草事典にはしばしば，蛇やサソリのモチーフが登場するが，これらは毒蛇や毒のある虫の解毒に用いられる薬草と共に描かれるのが一般的である．解毒が必要な場合は蛇やサソリの絵を頼りに薬草事典を引けるようになっており，これらが「しおり」のような役割を果たしていたことが推察される．例えば（図 5）の「パセリ」の下には蛇が描かれているが，実際，この薬草には蛇の解毒に効果があると記されている[26]．

薬草事典に見られる非写実的な挿絵は，現代の我々からすれば不可解に思えるかもしれないが，当時の使用者にとっては有用だったのではないだろうか．

4. 12–14 世紀：大学・医学部の誕生と発展

12 世紀頃になると，大学の誕生と医学部の発展により，聖職者ではない，世俗の人間が医療に参入し，医学は大学という場において実践から切り離され，スコラ哲学的な知的，論理的学問に仕立て上げられてゆく．医学部での学びは知識を重視し，教科書の内容を理解し暗記することに重点が置かれた．そのようなコンテクストで用いられた医学書，例えば大学の教科書として用いられた *articella* と呼ばれるテクストなどでは，そもそも挿絵がないのが一般的だった[27]．座学中心の学問に挿絵は不要だった，加えて，学生たちが教科書を筆写する場合など，挿絵を入れる金銭的・時間的な余裕がなかったということが理由として考えられる．

そのようななか，13 世紀末から 14 世紀初頭にサレルノまたはナポリで制作され，サレルノの医学校との関連が指摘されている薬草事典は注目に値する[28]．現在大英図書館に所蔵されている『薬草論』（*Tractatus de herbis*）とそのほか複数の医療書をまとめた写本である（図 6，7，8）[29]．『薬草論』は，12 世紀におそらくサレルノで編纂されたとされる『単純薬について』（*De simplici medicinae*）というテクストがもととなってはいるが，この形に編纂されたテクストとしてはロンドン本が現存最古

図 6　London, British Library, MS Egerton 747, fol. 1r「序文・A から始まる薬草のリスト」

図 7　London, British Library, MS Egerton 747, fol. 26v「ユウガオ」(*Lagenaria siceraria*)

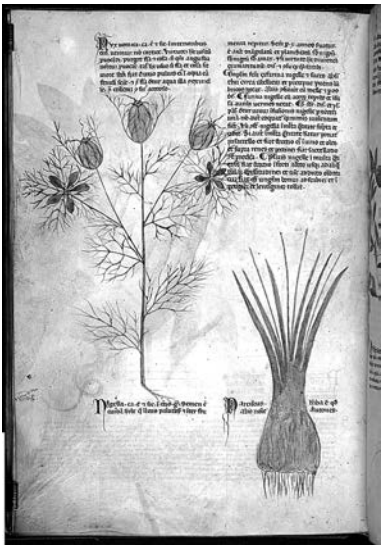

図 8　London, British Library, MS Egerton 747, fol. 68v「クロタネソウ」(*Nigella sativa*, L.)

図 9　「クロタネソウ」(©2017 Shelly S. Cramm)

で，この編纂のオリジナルとも目されている[30]．さらに，実物を観察して描いたと思われる挿絵が多数入れられており，それらは後世の薬草事典の挿絵に多大な影響を与えた．

それほど重要な写本でありながら，本書の注文主について定かなことは分かっていない．ただ，写本の制作方法，例えば一丁が 12 葉から成る 12 の折丁から成って

いる点などが，当時のナポリ大学関連の写本と共通しているほか，レイアウト，テクストの筆写の特徴や，略字を多用している点，フォリオ 1r のイニシャル C の中に描かれている人物が大学の博士が着る衣服をまとっているということなどから，大学関係者が読者であったと推測されている（図 6）[31]．とはいえ，豪華な装飾が施されたフォリオ 1r や，実に 406 もの薬草の挿絵が描かれていることからすると，いわゆる普段使いの研究書というよりは，特別に注文された写本と考えるのが妥当であろう．

フォリオ 1r（図 6）の装飾を施した人物は，サレルノやボローニャで活動した彩飾画家 Jacobellus da Salerno の影響を受けたプロの画家と考えられているのに対し，薬草の挿絵を描いたのは異なる人物，それも 2 名で，プロではなかった可能性が指摘されている[32]．しかしながら，その多くが実物を観察して描いたかのような挿絵は，700 年以上経った現在でも種を同定することが可能なものもあるほどだ．例えば，フォリオ 68v 左欄のスペースいっぱいに，さらに左マージンにまではみ出して伸び伸びと描かれたクロタネソウ（*Nigella sativa*, L.）は，針のように細い葉の特徴を実によく捉えている（図 8，9）．無論，挿絵の質や写実性にはばらつきがあるが，クロタネソウのように実物を前にして描いたかのような例は，これまでの薬草事典の挿絵の伝統から逸脱しており，驚きに値する．なぜこのような例外が生まれたのか，その理由の一つとして挙げられるのは，本写本は編者が新たにテクストを編纂したため，手本となる写本や挿絵がなく，実物を描くしかなかったであろうという点である．しかし，そうであるとしても，手本がないなかでなぜわざわざ挿絵を描いたのか，それも，薬草事典の伝統的な挿絵のような図式的なものではなく，植物を実際に観察し，その形態を的確に把握した描写となったのかという疑問が残る．それに関連し，本写本を詳細に分析したミンタ・コリンズは興味深い推察を行なっている．彼女は，薬草の挿絵を担当した 2 名のうち，写実性の高い挿絵を描いた人物は本書のテクストと薬草そのものを深く理解した人物として指導的な立場にあり，もう一名は，アシスタントもしくは見習い的な位置付けであったということ，さらに，指導的な立場の前者は写本の編纂者自身だったのではないかとしている[33]．だとすれば，写実的な挿絵は副次的な存在ではなく，テクストそのものを補う，本書に不可欠な要素として企画されたのではないだろうか．コリンズの推測は大胆な仮説に思えるが，当時のサレルノの状況，そして何よりこの写本の挿絵の革

新的な写実性を踏まえると首肯しうる説である.

サレルノは早くも 10 世紀半ばには，ヨーロッパにおける医療の学びと実践双方で中心的な存在となっていた[34]．地中海の中心にあるという地の利に加え，13 世紀，神聖ローマ皇帝フリードリヒ 2 世の治世に異文化を積極的に受け入れ交流する伝統が醸成されたおかげで，ギリシア，アラビア，ユダヤの医学の知識が流入した．また，モンテ・カッシーノとの距離的な近さもサレルノで医療が発展する要因となったようだ[35]．同地は修道院医療の中心的な役割を担い，11 世紀には重要なアラビア系医学書の翻訳を手掛けたコンスタンティヌス・アフリカヌスを擁していた．さらに，サレルノでは少なくとも 12 世紀頃までは，医療の理論のみならず実践を重視していた点も注目に値する．実はサレルノで大学が設立するのは 13 世紀後半で，組織としての医学部もようやくその頃にできたようだが，理論と知識を重視する大学の設立が他都市より遅かったことが，実践的な医療の伝統を長らえさせた可能性はある[36]．また，フリードリヒ 2 世が 1231 年に発布した「メルフィ憲章」（*Constitutiones Melphitanae*）の第 47 条にも注目したい．ここには，彼が治めたシチリア王国の各都市においては，薬の調合は 2 名の薬剤師によってなされなければならないとあるが，例外として，サレルノでは医学部修了者による監督が義務付けられていた[37]．この規定は，サレルノの医学部の特権的な地位を示すものとして解釈されているが，サレルノでは医学部で学んだ者は座学のみならず調薬といった実践的な知識も体得していたと解釈することもできよう.

ちなみに，本写本の制作時期より遅れること数十年，14 世紀前半に活躍し，サレルノでも教鞭をとっていた医学者マッテオ・シルヴァーティコ（Mattaeus Silvaticus）は，当時のナポリ王ロベルトに要請されてサレルノに薬草園（*Giardino della Minerva*）を作り，主にギリシア産の薬草を育てていたとされる[38]．このように，サレルノでは医師も薬草に関するプラクティカルな知識を持ち，実物を観察するという伝統が存在していたようだ．とすれば，ロンドン本『薬草論』の写実的な挿絵は，実際に薬草を育て，観察し，研究や治療で用いていた医師の監修のもとで描かれたとしても不思議はない.

5.　14 世紀末–15 世紀：パトロネージと挿絵の変革

ロンドン『薬草論』からおよそ百年後，14 世紀終わりから 15 世紀初めに，今度は北イタリアのパドヴァで，挿絵入り薬草事典の珠玉とも呼べる作品が制作される．大英図書館所蔵『カッラーラ本草書』と呼ばれる作品だ（図 10，11）．注文主はパドヴァ領主でカッラーラ家当主のフランチェスコ 2 世（1356–1406 年，治世 1390–1405 年），テクストは 13 世紀にイブン・サラービー（Ibn Sarabi/Serapion）によってアラビア語で書かれた『単純薬について』をパドヴァ方言に翻訳したものである．本書の筆写，翻訳ともに修道士ヤコブス・フィリップス（Jacobus Philippus）が担当したと考えられている[39]．本書の最大の特徴はなんといっても，挿絵の写実性と際立った芸術性である．例えば，「キュウリ」（*Cucumis sativus*, L.）の挿絵は「中世におけるキュウリの描写のなかで最も正確かつ美しい」とする植物学者の評もあるほどだ（図 10）[40]．先のロンドン本『薬草論』も写実的描写に優れていたのは上述の通りだが（図 7），『カッラーラ本草書』は，「写実」の持つ意味合いが『薬草論』のそれとは明らかに異なっている．おそらく制作意図の違いに由来するその違いを理解するために，まずは写本の注文主フランチェスコ 2 世の人物像を確認したい．

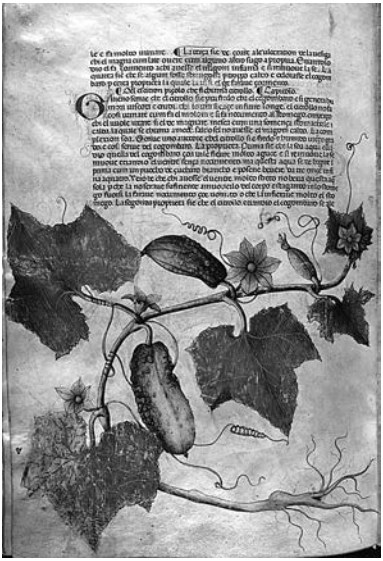

図 10　London, British Library, MS Egerton 2020, fol. 162v「キュウリ」(*Cucumis sativus*, L.)

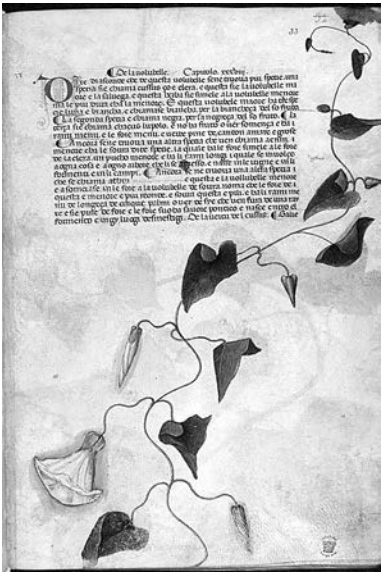

図 11　London, British Library, MS Egerton 2020, fol. 336r「シロバナヒルガオ」(*Convolvulus sepium*, L.)

フランチェスコ 2 世は，いうまでもなく医療の専門家ではないが，宮廷に人文主義者を擁していたほか，カッラーラ家代々の当主の役目としてパドヴァ大学の庇護も行うなど，知や学問のパトロンとしての君主というスタンスを取っていた[41]．彼の父フランチェスコ 1 世の治世中には，領内のアルクァ（Arquà）にペトラルカが滞在し（1368–74 年），ペトラルカの書記を務め，フランチェスコ 2 世の友人でもあった人文主義者ジョヴァンニ・ディ・コンヴェルシーノ・ダ・ラヴェンナ（Giovanni di Conversino da Ravenna; 1343–1408 年）は，1379 年から 1382 年，次いで 2 世の治世中の 1392 年から 1404 年の 2 度にわたりカッラーラ宮に出仕した．カッラーラ家ではこのように，2 代にわたって宮廷に人文主義を根付かせていったようだ．

フランチェスコ 2 世はパドヴァ大学医学部に対しても様々な支援を行った．同学部に著名な教授を招聘したほか，最大の功績として，法学部から医学部の運営を独立させたことが挙げられる．これにより，14 世紀後半から同医学部の名声が高まるのに一役買ったと指摘されている[42]．また当時は，自然や庭園，植物や薬草などを，単なる有用なものとしてだけでなく，愛でる文化も醸成されつつあった．例えば，

ボローニャ出身の法律家ピエトロ・デ・クレシェンツィ（Pietro de'Crescenzi）によって 1304–09 年頃に執筆された『田園の恩恵に関する書』（*Liber ruralium commodorum*）は，いわゆる園芸学の指南書のような内容で，その後数世紀にわたって各国で読み継がれた人気のテクストだったが，薬草を含めた植物が人々の理知的精神に喜びをもたらし，身体の健康にもつながることを説いているほか，社会的地位に応じた庭園のあるべき姿や広さについても論じている[43]．また，上述の Giovanni di Conversino は，1399 年にパドヴァで著した『弁明（*Apologia*）』において，自ら庭を散策し，草花や薬草を愛で，雑草を抜くなどの手入れをしていた様子を語っている[44]．

『カッラーラ本草書』の革新的な挿絵表現は，このような背景を踏まえることで理解することができよう．前述のロンドン本『薬草論』では，医学関係者が，自身の職業的な関心から薬草を観察し記録したと考えられるのに対し，『カッラーラ本草書』は，注文主の医学や薬草，植物に対する関心と君主としてのたしなみを体現・視覚化した産物といえる．『薬草論』がラテン語で書かれていたのに対し，本書がパドヴァ方言で書かれていたことも，アマチュアのための本であったことを思わせる．

残念ながら，本書の挿絵を描いた画家は判明していないが，その質の高さからすれば，『薬草論』の場合とは異なりプロの画家であったことは疑いない．加えて，挿絵のなかには彩飾写本の慣習的なレイアウトを無視し，モダンでさえある大胆な構図も見られ，写本以外の分野でも活躍した人物の関与を思わせる（図 11）．また，種の特徴を同定できるよう花や実，葉，根などの形状を明瞭に描いてはいるものの，繊細な陰影を施したり，茎のしなり方など，美的な構図を意識したかのようなデフォルメが見られるところから，単なる実用や学問的な用途の挿絵ではなく，鑑賞を前提としていたことが推察される．本書の挿絵は，テクストに付随し，その理解や暗記を促すための道具ではなく，いまやテクストを差し置いて主役の座に着いているといえよう．注文主フランチェスコにとっては，自らの知的関心を満たす一冊であったとともに，知性と趣味の良さを宮廷サークルで披瀝するのに格好の品であったに違いない．

6. 写本から印刷本へ

15 世紀へと足を踏み入れる時期に制作された『カッラーラ本草書』の写実性と芸術性の際立った挿絵はしかし，その後に続く薬草事典の挿絵文化そのものの変革をもたらすことはなかった．宮廷という閉ざされた環境にあったためからか，コピーが流布しなかったことも一因と考えられる[45]．

むしろ，15 世紀の挿絵入り薬草事典の制作に大きな影響を与えたのは，先述のロンドン本『薬草論』の挿絵だった．先に述べた通り，ロンドン本のテクストは 12 世紀に編纂された『単純薬について』（*De simplici medicinae*）をもとにしているが，15 世紀に制作された『単純薬について』の写本，とりわけフランス語圏で多く制作されたフランス語訳（*Livre des simples médecines*）の挿絵は，ロンドン本『薬草論』の影響が色濃く見て取れる．これらの挿絵の多くは，度重なる模写によって図式化，抽象化がなされていった（図 12）．また，フランス語訳されたものの中にはフランスやブルゴーニュの貴族に所有されたと考えられる豪華彩飾写本が少なからず存在するのも特筆すべき点である[46]．テクスト自体の分かりやすさや，挿絵がセットとなっていたという点から，王侯貴族の蔵書として好まれたのであろう．

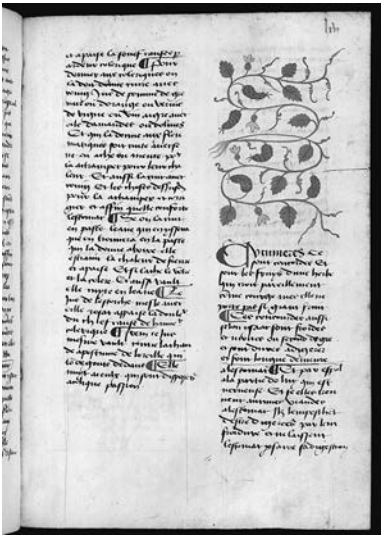

図 12　London, Wellcome Institute, MS.626, fol. 66r「キュウリ」(*Cucumis sativus*, L.)

図 13　München, Bayerische Staatsbibliothek, 4 Inc.s.a. 179, fol. 105v「マンドラゴラ」

1455 年頃，ドイツのマインツにて，ヨーロッパで初めて活版印刷術による書物が出版される．挿絵入り薬草事典の出版が行われるのはその後 30 年ほど経ってからであるが，「長い中世」と近世との狭間の時代，書物を大量に複製する活版印刷術によって挿絵入り薬草事典というジャンルにどのような変化が生じたのかを最後に見ていきたい．

活版印刷術による初めての挿絵入り薬草事典が出版されたのは 1481 年から 84 年頃，ローマの出版者で教皇シクストゥス 4 世に仕えていたジョヴァンニ・フィリッポ・デ・リニャミネ（Giovanni Filippo di Lignamine）による偽アプレイウス著『本草書』（*Herbarium*）である（図 13）[47]．全部で 132 枚の木版挿絵が入れられているが，興味深いことに，まるで時代に逆行したかのような，極めて中世的な図式的・抽象的描写となっている．一見不可解なこの現象の理由は，序文を読むと明らかになる．出版者自身の言葉による序文には，リニャミネがモンテ・カッシーノ修道院で発見した「古代の写本」を底本として出版したと述べられている．この底本は，かつてモンテ・カッシーノに所蔵され，第二次大戦によって失われてしまった 9 世紀の写本と考えられている[48]．かつて医療の中心として名を馳せたモンテ・カッシー

ノに所蔵されていた写本を，挿絵も含めて「複製」するという行為からは，リニャミネが挿絵の写実性よりも伝統と権威を重視していたことが透けて見える．また，本書には刷りが 2 種存在するが，一つ目の刷りには枢機卿フェデリコ・ゴンザーガに，二つ目には枢機卿ジュリアーノ・デッラ・ロヴェーレ（後の教皇ユリウス 2 世）に献呈する旨の文言が印刷されている．底本の出自の由緒正しさを強調している点，2 人の枢機卿に献呈している点など，あらゆる手立てを用いて本出版の権威付けを図ろうとしていたことが読み取れる．

以上の通り，記念すべき挿絵入り薬草事典最初の印刷本は伝統回帰の色合いが強かったが，そこから間をおかず，1485 年にマインツのペーター・シェーファーの印刷所で出版されたドイツ語の薬草事典『健康の庭』は，挿絵入り薬草事典のその後の発展の方向性を示す重要な作品となった（図 14）[49]．本書はマインツ大聖堂参事会員で下級貴族のベルンハルト・フォン・ブライデンバッハの企画による出版と考えられている．全部で 381 枚にもなる木版挿絵は写実的な描写を多く含んでいるとして注目されてきたが，挿絵を精査すると，前述のロンドン『薬草論』を祖とする挿絵の系統から影響を受けた，比較的図式的な挿絵が多く含まれていたり，写実性の高いものについても，手本となる挿絵入り写本が同定されるなど，必ずしも全てが自然を観察して描いたものでないことも分かっている（図 14，15）[50]．

一方で，イチゴ，ウサギ，キツネ，タマネギ，ポロネギなど，とりわけ当時のマインツ周辺で目にすることができたであろう動植物の挿絵に写実的なものが多いのは特筆すべき点であろう（図 16，17）．それらは，挿絵の原画担当の画家が実物を知って描いた可能性が高い．

しかし本論考で最も重視したい点は，本書の企画者ブライデンバッハの，挿絵の写実性に対する認識である．彼が執筆したとされる序文を読むと，神が無力な人間のために創造した種々の薬草の効能を正しい色と形（‘mit yren rechten farben und gestalt’）であらわした本を編纂することを目的としたと述べられている[51]．この「正しい色と形」というフレーズが，単なるレトリックではなく，実際に挿絵の写実性を指しているということは，序文を読み進めると明らかになる．例えば，本書の編纂を進める中で，ドイツの地に生えていない薬草については伝聞によってしか「正しい色と形」で描写することができなかったが，恩寵により聖墳墓とシナイ山を訪れる機会を得たために，有能な画家を同行させ，彼に当地の薬草を「正しい色

図 14　München, Bayerische Staatsbibliothek, 2 Inc.c.a. 1601, 第 349 章「イヌホオズキ」(*Solanum nigrum* L.)

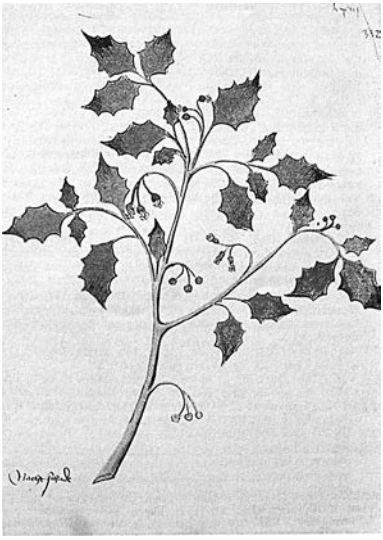

図 15　Bad Berleburg, Sayn-Wittgensteinische Schloßbibliothek 旧蔵 Ms. RT 2/6（現所蔵先不明），1475 年以前，fol. 332r「イヌホオズキ」(*Solanum nigrum* L.)

図 16　München, Bayerische Staatsbibliothek, 2 Inc.c.a. 1601，第 103 章「タマネギ」

と形」で描写させた，云々とある．「挿絵は不完全で信用に値しない」という中世的な価値観から脱し，薬草事典の挿絵の写実性の必要性と価値を明示的に語った，極めて興味深い序文である．もちろん，実際の挿絵では，とりわけドイツに自生しない薬草などは写実から程遠いものも少なからず存在するので，序文の内容を額面通りに受け取ることはできないが，本書のセールストークとして，挿絵は実物を模して描いた，しかも，人々の憧れの地であったはずの聖地でしか見られない薬草を，腕の立つ画家が描いたと述べているということは，それがこの本の価値となりうるとの認識があったからに他ならない．加えて注目すべきは，本書はドイツ語で出版されているということである．つまり，本書の読者層は医療関係者などのいわゆる専門家に限らず，ブライデンバッハ自身のようなアマチュアも想定されていたということであろう．ちなみに，序文で言及されている「有能な画家」（‘einen maler von vernunfft und hant subtiel und behende’「理性を持ち，繊細かつ巧みな手を持つ画家」）は，本書出版の翌年にブライデンバッハが出版した『聖地巡礼』の挿絵を全面的に担当した，エアハルト・ロイヴィッヒと推定されている．『健康の庭』は，単なる実用書としての薬草事典に留まらず，いわば挿絵を愉しむことも可能な書物として企

図 17　München, Bayerische Staatsbibliothek, 2 Inc.c.a. 1601，第 190 章「イチゴ」

画されたのであろう．その点は『カッラーラ本草書』と共通するが，根本的に異なるのは，後者が貴族のサークルという限定された読者層を想定し，その排他的な性質そのものが価値を高めるのに貢献していたのに対し，『健康の庭』は，活版印刷術を用い，不特定多数の人々が手に取ることを可能ならしめたという点である．中世末期，あるいは近世の幕開けに至り，知が，階級や職業，地域の呪縛から少しずつ解放されつつある様相を，『健康の庭』という書物が体現したといえないだろうか．

7.　結び：薬草事典の挿絵と知のあり方の変遷

本論考では，限られた紙幅で千年近い薬草事典の挿絵の変遷を概観した．粗い考察ではあったものの，そこから明らかになったのは，挿絵は薬草事典がどのように受容されたのかを，まさに視覚的に示していたということである．薬草事典は，医療とそれにまつわる知を体現するものとして，権威と政治的な意図を反映し，人間の健康のために必要な実用の書としての役割を期待され，アカデミックなコンテクストや医療の実践に対する関心のもとに編まれ，あるいは植物を愛でる文化や趣味の良さを反映し，知的好奇心を満たす道具として機能した．写実性の度合いも，それぞれの時代やコンテクストを反映して変化していったが，15 世紀も末になると，

活版印刷術という技法を用いて複製され，広く流布するようになった薬草事典は，魅力的な挿絵とともに，中流階級の知的好奇心を満たし，それまで限られた人々のみの専有となっていた知の民主化への道を開いたことであろう．ここに至り，挿絵入り薬草事典は，我々の時代の薬草事典へと向けて新たな一歩を踏み出したといえるかもしれない．

註

[1] 本稿は，2024 年 6 月 16 日，西洋中世学会全国大会シンポジウム「薬を語る・薬を知る―西洋中世の薬の歴史と文化―」にて行なった発表「何のため？ 誰のため？ 中世薬草事典の挿絵について」に加筆・修正を行なったものである．本シンポジウムのコーディネーター久木田直江先生，シンポジウム登壇者の山辺規子先生，横山安由美先生，橋爪烈先生には，当該発表の構成段階から多くのアドバイスをいただいた．この場を借りて御礼申し上げたい．

[2] 岡田稔「新訂への序文」岡田稔，三橋博監修『新訂原色牧野和漢薬草大圖鑑』（北隆館，2002 年）p. 2.

[3] 中野定雄ほか訳『プリニウスの博物誌』第 2 巻（雄山閣，1986 年）p. 1055.

[4] Cod. Med. Gr. 1. Minta Collins, *Medieval Herbals: The Illustrative Traditions* (The British Library, 2000), pp. 38–40.

[5] Claudine A. Chavannes-Mazel, ‘From Copy to Copy: 1500 Years of Plant Illustration: The Manuscript Tradition’, in *The Green Middle Ages: The Depiction and Use of Plants in the Western World 600–1600*, ed. Claudine A. Chavannes-Mazel and Linda IJpelaar, CLAVIS Kunsthistorische Monografieën (Amsterdam University Press, 2023), p. 39.

[6] 手本の存在については，越宏一「ナチュラリスティックな植物表現の成立―デューラー前史・総論」『言語文化』第 30 号（2013 年），明治学院大学言語文化研究所，pp. 18–19 を参照のこと．また，以下の論文では，薬草の挿絵の一部については，種の同定を行えるほど精度の高い挿絵は多くはないと指摘されている．Leslie Brubaker, ‘The Vienna Dioskorides and Anicia Juliana’, in *Byzantine Garden Culture*, ed. Antony Littlewood et al. (Dumbarton Oaks Research Library and Collection, 2002), pp. 199–200, 207.

[7] 日本語によるディオスコリデス『薬物誌』の文献としては，以下を参照されたい．大槻真一郎『西洋本草書の世界：ディオスコリデスからルネサンスへ』澤元亙編（八坂書房，2021 年）.

[8] Brubaker,‘The Vienna Dioskorides’, pp. 208–9.

[9] Bente Kiilerich, ‘The Image of Anicia Juliana in the Vienna Dioscurides: Flattery or Appropriation of Imperial Imagery?’, *Symbolae Osloenses* 76 (2001): pp. 169–90.

[10] Collins, *Medieval Herbals*, pp. 42–43.

[11] Brubaker,‘The Vienna Dioskorides’, pp. 211–12.

[12] Nancy G. Siraisi, *Medieval & Early Renaissance Medicine: An Introduction to Knowledge and Practice* (The University of Chicago Press, 1990), p. 6.

[13] Siraisi, *Medieval & Early Renaissance Medicine*, p. 10.

[14] Chavannes-Mazel, 'From Copy to Copy', pp. 39, 41.

[15] Chavannes-Mazel, 'From Copy to Copy', p. 41.

[16] Chavannes-Mazel, 'From Copy to Copy', p. 41. 本写本は以下にてデジタルファクシミリが閲覧できる. 'Herbarium / Pseudo-Apuleius, and other text (s), VLQ 9', *Leiden University Libraries Digital Collection*〈http://hdl.handle.net/1887.1/item:4151654〉(最終閲覧日：2025 年 12 月 8 日).

[17] Bodleian Library, Hatton 76. 本写本は, 以下にてデジタルファクシミリが閲覧できる. 'MS Hatton 76', *Medieval Manuscripts in Oxford Libraries*〈https://medieval.bodleian.ox.ac.uk/catalog/manuscript_6095〉(最終閲覧日：2025 年 12 月 8 日). 残る 2 冊の写本は, 共に大英図書館所蔵の Harley 585 と Harley 625 B である.

[18] Linda E. Voigts, 'Anglo-Saxon Plant Remedies and the Anglo-Saxons', *Isis* 70, no. 2 (1979): pp. 255–56.

[19] Maria Amalia D'Aronco and Malcolm Laurence Cameron, *The Old English Illustrated Pharmacopoeia: British Library Cotton Vitellius C III*, Early English Manuscripts in Facsimile 27 (Rosenkilde and Bagger, 1998), pp. 27–33 (esp. pp. 31–33).

[20] 2 枚の扉絵と装飾タイトルページの解釈については未だ定説がない. それついては, Collins, *Medieval Herbals*, pp. 193–96 を参照のこと.

[21] Claire Breay and Joanna Story, eds, *Anglo-Saxon Kingdoms: Art, Word, War* (British Library, 2018), pp. 274–75.

[22] Voigts,'Anglo-Saxon Plant Remedies', pp. 259–63; D'Aronco and Cameron, *The Old English Illustrated Pharmacopoeia*, p. 91.

[23] Frances Yates, *The Art of Memory* (The University of Chicago Press, 1966), pp. 9–10.

[24] Mary J. Carruthers, *The Book of Memory: A Study of Memory in Medieval Culture*, Cambridge Studies in Medieval Literature 10 (Cambridge University Press, 1990), p. 222. Gilbert Crispin の絵に関する言及は以下に掲載されている. Gilbert Crispin et al., *The Works of Gilbert Crispin, Abbot of Westminster*, with British Academy, Auctores Britannici Medii Aevi 8 (Published for the British Academy by the Oxford University Press, 1986), p. 52.

[25] Michael Evans, 'The Geometry of the Mind', *Architectural Association Quarterly* 12, no. 4 (1980): p. 34, '2.3 Art and Argument'.

[26] Anne Van Arsdall, *Medieval Herbal Remedies: The Old English Herbarium and Early-Medieval Medicine*, Second Edition (Routledge, 2023), p. 117.

[27] *Articella* については以下を参照のこと. Siraisi, *Medieval & Early Renaissance Medicine*, p. 58.

[28] サレルノ医学校については以下を参照のこと. Paul Oskar Kristeller, 'The School of Salerno: Its Development and Its Contribution to the History of Learning', in *Studies in Renaissance Thought and Letters*, Reprint of the first edition in 1956, vol. 1 (Edizioni di Storia e Letteratura, 1984).

[29] MS Egerton 747. 本写本については以下に詳しい. Minta Collins and Sandra Raphael, *A Medieval Herbal: A Facsimile of British Library Egerton 747* (The British Library, 2003); Collins, M*edieval Herbals*, pp. 239–98; Jean A. Givens, 'Reading and Writing the Illustrated *Tractatus de Herbis*, 1280–1526', in *Visualizing Medieval Medicine and Natural History, 1200–1550*, ed. Jean A. Givens et al. (Ashgate, 2006). また, 本書の分析を含め, イタリア絵画における 'nature studies' の萌芽を考察した以下の古典的論文も参照されたい. Otto Pächt, 'Early Nature Studies and the Early Calendar Landscape', *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes* 13, no.

1/2 (1950): pp. 13–47. なお，本写本は以下のウェブサイトで全ページのデジタルファクシミリが閲覧できる．‘egerton ms 747’〈https://iiif.bl.uk/uv/?manifest=https://bl.digirati.io/iiif/ark:/81055/vdc_100058663072.0x000001〉（最終閲覧日：2025 年 12 月 7 日）.

[30] Collins, *Medieval Herbals*, p. 240; Givens, ‘Reading and Writing’, p. 118.

[31] Collins, *Medieval Herbals*, p. 242; Collins and Raphael, *A Medieval Herbal*, pp. 2–5.

[32] Collins, *Medieval Herbals*, pp. 245–49.

[33] Minta Collins, ‘Introduction’, in *A Medieval Herbal*, by Collins and Raphael, p. 14.

[34] Siraisi, *Medieval & Early Renaissance Medicine*, p. 13.

[35] Siraisi, *Medieval & Early Renaissance Medicine*, p. 58; Collins, ‘Introduction’, p. 10; Collins, *Medieval Herbals*, p. 256.

[36] Siraisi, *Medieval & Early Renaissance Medicine*, p. 57.

[37] Kristeller, ‘The School of Salerno’, pp. 171–73.

[38] George Sarton, *Introduction to the History of Science*, 3: *Science and Learning in the Fourteenth Century* (Williams & Wilkins Company, for the Carnegie Institution of Washington, 1947), p. 221. *Girardino della Minerva* は現在もサレルノに存在し，見学も可能である．

[39] Sarah Rozalja Kyle, *Medicine and Humanism in Late Medieval Italy: The Carrara Herbal in Padua*, Medicine in the Medieval Mediterranean 8 (Routledge, 2016), pp. 1–2.

[40] Harry S. Paris et al., ‘Medieval Herbal Iconography and Lexicography of Cucumis (Cucumber and Melon, Cucurbitaceae) in the Occident, 1300–1458’, *Annals of Botany* 108 (2011): p. 477.

[41] Felix Andreas Baumann, *Das Erbario Carrarese und die Bildtradition des Tractatus de herbis: Ein Beitrag zur Geschichte der Pflanzendarstellung im Übergang von Spätmittelalter zu Frührenaissance*, Berner Schriften zur Kunst 12 (Benteli, 1974), p. 11.

[42] Kyle, *Medicine and Humanism*, pp. 92–93.

[43] Johanna Bauman, ‘Tradition and Transformation: The Pleasure Garden in Piero de’ Crescenzi’s *Liber Ruralium Commodorum’, Studies in the History of Gardens & Designed Landscapes* 22, no. 2 (2002): pp. 100–103; 桑木野幸司『ヨーロッパ綺想庭園めぐり』（白水社, 2025），pp. 69–71. De’Crescenzi の生涯については Bauman pp. 112–113; Kyle, *Medicine and Humanism*, pp. 74–75 を参照のこと．クレシェンツィの名前の日本語表記にあたっては，白水社の糟谷泰子氏を通じ，桑木野幸司先生よりアドバイスを頂戴した．

[44] Baumann, *Das Erbario Carrarese*, p. 11.‘Conversini, Giovanni.’ *Dizinario Biografico degli Italiani*, Vol.28 (1983)〈https://www.treccani.it/enciclopedia/giovanni-conversini_(Dizionario-Biografico)/〉（最終閲覧日：2025 年 12 月 2 日）.

[45] 『カッラーラ本草書』の挿絵からの引用が見られる数少ない写本として知られる，ヴェネツィアのマルチアーナ図書館所蔵 lat. VI, 59 については以下を参照のこと Baumann, *Das Erbario Carrarese*, pp. 126–28; Kyle, *Medicine and Humanism*, p. 53; Sarah R. Kyle, ‘A More Modern Order: Virtual Collaboration in the *Roccabonella Herbal*’, in *Plants in 16th and 17th Century: Botany between Medicine and Science*, ed. Fabrizio Baldassarri (De Gruyter, 2023), pp. 19–52.

[46] Collins, *Medieval Herbals*, pp. 281–83; Baumann, *Das Erbario Carrarese*, pp. 120–22. フランス語訳の最初期の写本として 15 世紀初頭に上流階級のエリート層のために制作されたと考えられている，コペンハーゲン王立図書館所蔵 GKS MS 227 2º に関する以下の論考も参照されたい．Givens, ‘Reading and Writing’, pp. 125–35.

[47] 出版の時期については，1481 年から 82 年頃，1482 年から 83 年頃，1483 年から 84 年頃，と現在でも説が分かれている．以下を参照のこと．*Incunabula Short Title Catalogue*（ISTC No. ih0058000）〈https://data.cerl.org/istc/ih00058000〉（最終閲覧日：2025 年 12 月 4 日）；Dominic Olariu, 'The Misfortune of Philippus de Lignamine's Herbal or New Research Perspectives in Herbal Illustrations from an Iconological Point of View', *Max-Planck-Institut für Wissenschaftsgeschichte* Preprint 469 (2015): pp. 8–9.

[48] Codex Casinensis 97.

[49] 池田真弓「ペーター・シェーファー出版『ラテン語本草』と『健康の庭』—15 世紀印刷本草の挿絵分析—」『鹿島美術研究』第 32 号別冊（2015 年）：pp. 76–87; 池田真弓「『健康の庭』—本草挿絵の諸問題について」『言語文化』第 33 号（2016 年）明治学院大学言語文化研究所，pp. 28–46．本書も含めたマインツの初期印刷薬草事典の研究としては以下を参照のこと．Brigitte Baumann and Helmut Baumann, *Die Mainzer Kräuterbuch-Inkunabeln 'Herbarius Moguntinus' (1484), 'Gart der Gesundheit' (1485), 'Hortus sanitatis' (1491): Wissenschaftshistorische Untersuchung der drei Prototypen botanisch-medizinischer Literatur des Spätmittelalters* (Hiersemann, 2010).

[50] 『健康の庭』の一部の挿絵の手本の同定については，以下を参照のこと．Wolf-Dieter Müller-Jahncke, 'Deshalben ich solichs an gefangen werck vnfolkomen ließ: Das Herbar des "Codex Berleburg" als eine Vorlage des "Gart der Gesundheit"', *Deutsche Apotheker Zeitung* 117, no. 41 (1977): pp. 1663–71. 手本とされる写本 'Codex Berleburg（図 15）については以下を参照のこと．Werner Dressendörfer et al., eds, *Älterer deutscher 'Macer' —Ortolf von Baierland 'Arzneibuch'— 'Herbar' des Bernhard von Breidenbach —Färber- und Maler-Rezepte*, Codices illuminati medii aevi 13 (Edition Helga Lengenfelder, 1991).

[51] 序文は，以下の文献に全文が掲載されている．Ludwig Choulant, *Graphische Inkunabeln für Naturgeschichte und Medizin*, 2. Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1858 (Georg Olms, 2000), pp. 21–24．また，池田「『健康の庭』」p. 30 に序文の一部の和訳を掲載している．